

## 自分自身の「理解の世界」を構築しよう

理事長 新 野 宏

高校生の頃、「大学への数学」という雑誌にとりつかれたことがあります。毎号、懸賞問題に挑戦し、運が良ければささやかな賞品がもらえました。熱心に購読していたのは、別に賞品がほしかったからではありません。同じ問題でも何通りもの異なる解法が紹介されていることが面白かったからです。

答えがあることがわかっている数学の問題ですら、解答者の「理解の世界」によって多くの解法が編み出されます。ましてや、未解決の自然現象に対してはどれだけ多くの理解の仕方があることでしょう。

昨年3月の第34期第1回評議員会で、「若手研究者に将来専門研究者として活躍してもらうために、学会としてどのような支援ができるのか、また何をなすべきか」という理事会からの諮問に対して、評議員の皆様から、「大学院重点化による教育の質の低化を危惧している」、「学会の大会で若手の発表を聞いていると、短い時間での要領の良さに感心するが、短かすぎて議論が尽くされていない」など、多くの貴重なご意見をいただくことができました。

確かに、大学院の教員は法人化に伴い忙しさが増して大学院生と議論をする時間が減っています。ポストクの研究者は、プロジェクトの成果を上げるのに追われて、じっくりと疑問の解決に割く時間が不足しています。学会としても現在学術会議のIAMAS小委員会と共同で若手研究者に対するアンケートを準備中で、その集計結果をもとに、実態を把握し、可能なことから対策を講じていきたいと考えています。

しかし、それとは別に、若手研究者の方々に実践していただきたいのは、自分だけの個人的な自然の「理解の世界」を構築することです。1つのプロジェクトが終わったとき、プロジェクトの成果に加えて、是非とも自分の理解の世界が膨らんでいるようにしていただきたいのです。

私自身、気象の大学院に進んだとき、セミナーで飛

び交う議論から、人それぞれの様々な現象の理解の仕方を学ぶにつけ、何とか自分自身の自然現象の理解の世界を作り上げたいと思ったものでした。これには、指導教官だった木村龍治先生や松野太郎先生そして諸先輩方の広大な理解の世界を目の当たりにさせていただけたことも大きな動機となったことは事実です。

自分自身の理解の世界を作り上げる上で大切なことは、理解できないものは先ずは疑う姿勢だと思えます。例えば、セミナーで講師の言っていることは本当に正しいのでしょうか？ 自分が納得できないことや理解できないことはどんどん質問してみましょう。自分の間違いであれば理解の世界が広がりますし、講師の考え違いであれば講師の理解の世界が広がります。こんなことを訊いては恥ずかしいのではなどという心配は、自分自身の理解の世界を作り上げるという目標に比べると取るに足らないものです。

教科書や論文に書いてあることも疑ってかかりましょう。印刷された論文といえども、せいぜい2-3名の査読者と編集委員が目を通したに過ぎません。自分自身が理解できたことだけを信用しましょう。数日自分で検討して理解できないときは周囲の人に訊いてみましょう。知っている人は大抵喜んで教えてくれるので、理解の世界が広がります。誰も知らないときは、更に少し追求してみる価値があるかも知れません。

ここでは、若手研究者の方を例に挙げましたが、自分自身の理解の世界の構築は、さまざまな気象業務に携わられる会員の方々にも必ずやその業務に大きく役立つと思います。是非気象学会をうまく利用しながら、日頃から試みていただきたいと思います。

近年、気象学会の大会でも、昔に比べて講演発表に対する真剣な討論が減っているような気がしています。大会に集まる700名近い会員の皆様が、それぞれ日々構築された個人的な理解の世界を持ち寄れば、多様な理解の世界の真剣なせめぎ合いが見られたり、深い共感が得られ、更には自分自身の理解の世界をも広げられる魅力的な大会になるのではないのでしょうか？